里見八犬傳 第輯 巻五

へ13
3415
5

341
5

初編南総里見八犬傳

五

勝善院

八

東都　曲亭主人編次

第九回

盟誓を破て景連両城を囲む
戯言を信て八房首級を献ず

却説安西景連八義実の使者なりける金碗大輔を欺死留めて。おのゝびおのゝび軍兵を部ゝ。俄ゝ里見の両城へ発ことと推寄さり。その一隊八二千餘騎景連みづから三百騎ばかり。滝田の城の四門を囲み。昏夜をこゝろゞとこれを攻む。又その一隊八一千餘騎。菅戸訥平太弥大夫ゆく。堀内貞行が竜ゝる。東條の城を囲ませ両城一時ゝ攻潰さん。といやゞうゝまぞ攻登る。その縡乃ち仆稲麻の風ゝ戦ぐ如く。勢ひをさゝ破竹ゝ仆さり。このとき里見の両城も。兵粮甚ゝ乏ゝ民荒年の役ゝ労ゝてく。催促ゝ後ゝゞ口ゝ呆まさるのこゝなりまだ。

恩義のために命を軽んじ寄せ手屑とも せざる勇士猛卒なれはあらん限り。
をさ〳〵防戦ふるのみ。主客の勢ひ異なり〳〵。食せざる
ること七日に及べり。士卒ハ力なく堪へかねて疲労く。塀を踰て潛出射殺されし
敵の死骸の腰兵粮を捞取て。僅に餓を充はもあり。或ハ馬を殺し。死人の
肉を食ふもあり。義実いとこれを患ひて。枝倉木曽の氏元ホのろくの士
卒を聚合さて宮ふせう。景連ハ表裏の武士盟を破て義に違へ好ハ今
さらいふもなかりしを及べどさのみおそろく敵ハあらじ。彼両郡の衆我ハ
両城を攻撃べ。ことを二郡の衆をあく。彼ら二郡の衆に倍ふるや十二分に
勝るさとも。午角の軍ハ力つべ。こゝ徳ふるゝ五穀登らざ肉に倉廩
空しく外ハ仇の大軍あり。甲ひいまゝ〳〵ことを。ちゝ既に究まる。縱
百樊噲あるといふとも。餓ハ敵我を如何せん。

皆鳥夜に乘して西の城戸より走て去る。辛くも命を全せん。その時城に
少我放て。且ハ妻子を刺殺。義実ハ死をべ死なり。二郎太郎もとく
義よ。その術ハ固様こと精細に示し〳〵あべ。衆皆こと我ぶあくべ。
いとども。それ禄を受て妻子を養ひ。難に臨て苟且ハ腰ることハ要せず。
只頭身の息の内に寄せの陣へ夜襲よ〳〵名ある敵と刺ちべ君恩泉
下に報ぜん。この餘のるハ義だりも願ハ〳〵べいと辭ぶとく回答ようと。
義実ハ力の叮嚀に説諭〳〵べども。義引乳母なりけるこのと死義実の
もん子。二郎太郎義成ハ十六歳になりけるこのと死義実の
ゝそれとこのゝうちゆゝくをハせ〳〵。言果べるもあらざるハ父の乳母を
窺ひく。弱冠の某が異見をヤとるに非ずあらん後ど天の時ハ地の利にあらざど。

地の利ハ人の和ニ如ズ。城中既ニ兵粮竭ク。士卒飢渇ニ逼テ脱れ去らんと
ス。ものなく。併死を究めハ徳ヲより。恩義あり。只その和の致ス所歟
人の性ハ善なるべしや。寄手の軍兵ども。善悪邪正ハ去りつゝ又
兵粮ハ竭テ。毎日ハ煙をさせざるべ。敵ハ日まで。ひとりけど。短兵
急ニ攻難ざるハ。又の武勇ニおそるゝ所なり。とのゝ。ふくろ。武りく。計略と。大音
なるハ。の武擇く。城楼ハ。の。寄手ハ。対ひ。景連ガ非道の行状明白言ニ破り。
恩義仇と。不義の軍を起ス。その罪義責させ。士卒忽地慚愧
ス。攻戦ハ。のゝ。ろ。失なん。そのとき。城より。ろ。生ハ一揉ニ突崩さ。
勝ざとハ。ろ。ざ。この。ハ。ん。と言。ハ演。ハ。衆皆ハ
管感佩ス。ろ。べ。とまう。ゆ。義。実ハ。ス。その。ス。と。
景連ガ不義を数へ。その罪義責させ。ニ日来ハ。ハ。ス。ス。を。餓

て。絶ス。息つ。ど。城楼ハ。高く。堀ハ。広。腹の。筋の。ように。ま。口を。張り。面を
赤ス。ば。ハ。罵ど。敵の。陣ハ。声。届ば。果ハ。涙ハ。ス。れて。から。咳。
せ。の。ば。労ス。その。功。け。さる。程ニ。義。実ハ。怠ハ。脱れ。去ざる。
士卒。義。殺ス。ば。ハ。肺肝を。摧ハ。ど。輙く。敵を。退る。様。義。ば。
凝て。其。ニ至ば。とス。杖を。曳。園ニ。出。猶。伴。ハ。年来。愛させ。ス。
八房の犬ハ主を。ス。尾を。振ス。事ハ。け。と。ス。ハ。跟ニ。と
ス。足。定ス。ど。肉。脱て。骨。ス。眼。ス。ハ。鳥。乾ニ。義。実。と。義。高ス。
右ハ。義。ス。その。義。拊。鳴。呼。汝。も。餓。る。欲。士卒の。飢渇を。救ん。と。ス。と。ス。
ス。ば。ハ。汝。ス。を。右。ニ。さ。賢。愚。その。差。ス。と。ハ。ス。ども。人。則。萬。物
の。霊。ス。義。ス。智。恵。ス。教ニ。従ひ。法。度。義。守ニ。礼。讓。恩。義。を。知る
ス。の。ニ。ば。欲。義。禁。ハ。情。ハ。怠。餓。ス。死。ス。も。天。命。時。運。と。ス。ば。ス。ハ。帝。め

なん只畜生ゆゑその智恵なし。教を受ず法度をしらず礼譲恩義を辨ず。欲を禁るよしもなし。只その主の養ひに一期を送るのみなれば饑て饑さる食を得るときは食を求てやまく媚もし又不佞なり。現畜生は恥辱をしらず。いと愚なるものなれども人にまけじとなりて死にあへて忘ず。譬ば犬の主を忘れず。見どころよく是を弁ずときは人の及ざる所性の勝る所あるなれば古歎にもいひくまの人はなかりし。その忠の誠あるときは小犬のぬしをしたふる慈悲和尚の縁とらおれも今試に汝に向ん十年の恩をよく知るや。かしその恩を知ることあらば寄手の陣へしのび入て。敵将安西景連を咬殺さば。城中の士卒の必死を救ふに至らん。かくせばその功第一なり。いかにこれをよくせんや。とうちながら笑つゝ向へば八房は主の貌をつくとうち向上てよくそのことを得たるが如し。義実いよく不佞におぼして又頭を磨。背を拊汝勉て功をとげよ。

しからば魚肉に飽すべしと宣へば背向になりて推辞るごとくみえしかば義実は然ば汝に向ていはん又しからば職を授ん欲せば領地を宛行ん欲するは官職領地も望しからずばこゝろ女壻にして伏姫を妻せん欲と問ふにこそ八房は尾を振り頭を擡て瞬もせず主の顔を熟視て吠しかば義実わくとうち笑ひ現伏姫は予に等しく汝を愛するものなれば得させまほしとこそ思へらや縡成るときは女壻にせんと宣ければ八房は前足屈て拝するが如く嗁声る悲しく他のえにつけば義実は興盡て。ある咄や。ある忌こしようなる戯言これながら。慢なる戯とおとりごちて。駈て奥にぞ入りけり。かくてその夜は大将も士卒もこの世の名残ぞとおもひ決めしけるなれば義実は宵の間は且く後堂にぞつきまして。夫人五十子息女伏姫嫡男義成をそびやかねし世老黨なる氏元等をほとりに近く召聚合て。かん盃を賜りつ。さりとも長柄の銚子のゝ酒一滴も

里見ようこ孫
里ようこ成
板倉氏元

伏姫
戯言を信じて八房
敵将の首級を献る
八ふさ

かゝりしかバ水無月のくさ葉に代者の枝つきの果子少しく出されしもそれも大かた蝕ばみて生平にハ下司もくらふべうもあらねども時にとりてハいと忝く愛しに膳上殊に蕭安ゆゑ只四表八表のおもて或ハ又来しうち揮せ給ひぬ。宦期のわかれハ一言も仰出さるゝことなかりしかど死を究めたる主従ハ。なかなかに勇をあり。かゝりとても武士の妻とある子となく黒髪の。なごり別れ惜むべき音にこそそれなれ。簾に住む虫れ。ことならも衰へて鮮く。濡るゝ袖の袂なからぬ心の中推量る女房なにたのあるに涙の泉堰とめかねて。おのが歎きに沈みけり。現理りと氏元ハ是ぞ杏一嗟嘆して。迷に目と目をあはされバ。七日巳来一粒も食せぬことも人も亦眼ハ凹み頬骨立尚死ぬる孫ども士とある顔色焦悴枯槁たり。今宵十日の月没て轟ばて出んと豫より軍令を兼る雑兵ホもおひおひに其首彼首に集まりて酒と稱て酌ミかはしも水にもうつる星の影消行

袖にかく霜も消るんす月ハうしや丑三比にもなりけり時刻ハよし。と義実又子ハよろひかぶと鎧抜かけ給へバ五十子伏姫傳の老女専女がもろ共に見てみに取てさゝげ持る太刀長刀のさやうなる風がわて来る遠寺の鐘声緒行無常と音ばなれて浩処に外面に犬のたかく声きこゆけれバ義実耳我側てて彼ハ八房か、し八房之異なる声ぞ皆ゆ出てみよ。と宣へバ。承りつ。と庭のへだて両三人衝と立て縁頬より指燭を抗八房ことと喚かけてとそんかりかへれバあやしき生ぐさき人の首を縁端にうち載て。八房ハ踏石に前足をかけつゝと件の首を守りてをり。こハいかにとぞろに訝るものの劇惑ひて。舊の処に走入り。かることぞと忽卒に報知あれバ主従男女のあへず驚きあやしまざるものなし。そが中に氏元ハ彼首をとりて熟視て。人の亡骸を食ふも犬のならひ是もよろしからず。そもそ来る首は怨れある人の

ぞや。御遊に五十子伏姫をまゐらせましかばよく追及ひ給ひとといへば再びさんと
す為。そのものどもを義実はさのみと喚とぶも犬は入れざるを妨なし。彼もいくて
餓たる隨に躬方の死骸を傷ひるが。そが侭には得さらしおかれみゞらう
いかなるくうんといひかけくれや。立よるべき氏元ぎりいかにさらえ男房女房散
動騒りて或は燭を秉て先に立義は主の後よりつゞく。命なるに縁頬挾し。
と件の頭をつくる程に義実は眉根を上せ木曽殿は何とやらんくる鮮血に塗れて
定かならねども景連に似てるらし。洗ふてよくみよと仰せければ氏元も亦承り
ながら浄の桶のほとりへよせて柄杓に水を汲うけて頭に塗る血を
つく編く洗流して主従交にこれをみれば果して敵将景連が首級に疑な
べうもあらず分明なりと宣へば僉疑ひすで解ながらなほその故を知る
よしなけれども人は及ばぬ軍功に只管犬を羨みたり。當下義実嗟嘆して宣

寄怪なるかな人なる前業後報なるかな。まうぞ今こそおもひあはさるれ。命ながら
なるに蜻蛉の命を捨んとおもひ決めし士卒をいかで救んとおもへどおもひを慰めて
つらつら思ふに郷の園へ出ぞおろ時は八房がいとよく餓たる欤又あるはよく瘠たるぞ
彼をおもひ此をおもひ憐み女の寄手の陣へ忍び入りて景連を咬ひ殺して城中なる
数百の士卒を救ふに至らば日毎に魚肉に飽せんといへども喜ぶ気色なし。
さらばとて所領を宛行ん欤重職を授ん欤といへども喜ぶ気色はさらざりし。
生平に汝を愛する伏姫を取らせん欤といひつるときに八房は欣しげなる
気色にて尾をふりつゝ吠る声常にあらぞいと思し。戯言なりとおもひ
よるまでに生ぜしといふとなれの慢なる匠と思ひよりきつく。その侭後堂の人と
聚合最期の軍議に暇なくてそのことは早忘られたるに犬は却て忘れざりし欤
言は後にこそ狛剣ならず虚言を実にするとて。寄手の陣へ潜ひいるとも二三千騎の

大将なる景連を輒く殺しそその首級を齎さと不思議としふもあるりあるを奇
るをしくと八戸をさし招死ばび近つけ。只管賞嘆ものべ氏元ホハ又さるふ
駭然とうく吉を巻き畜生めしく人よりび功あるるをとなる君が仁心徳
の致併神明仏陀の冥助ホトそと稱賛さかり祈る年候の兵
庭門よりを走り来つ敵ム異変のつあある欲猛ム乱ム騒ぶひ速ム殺ムめるぶ。
勝利疑ひあるべらびとあらうを我義実ばあるべさもあるべ時ろの殺しを
殺て出でといそび立て諸隊ム令我偽くさせ大将みづから寄ムの陣を敵長ん
とし見ハ射者義成ムとを景連既ム死しれが縦寄ムハ大軍ありとも追
拂ンといと易ろ。然る我ぶ大人挑くしく出させるハ物体ほ只義成ホ氏
元ど。さし副ら見てくるの足なん許させ人と猜ムしく庭門より走ム出
牽めく糸ら瘦馬ム身を跳ムせくくち跨めべ。氏元ハ士卒我激し。如此

如此のつのあるく。ナも景連我殺とるを後ムめハ犬ム芳ん出ム進めと呼らを。
三百餘騎を三隊ムころち義成ハ前門より。氏元ハ後門より。城戸を颯と推開せく。
乱ム騒ぐ寄ムの陣へ驀地ム突て入る勢ひ日来ム百倍して當るべうをあら
ざれば敵軍ものとく辟易して逃亡ぶるを半ホるびみなを降参ものびる。
鬱悒ろうの人のムめ。その夜ものぶく明ホけ。かくく義成氏元ハ山のごく積貯
さる寄ムの兵粮ほ皆ものたく城中へとり入ムて則縡の数我実ム報知ければ降
参せしめどもを悉釋ものして氏元ム領ものひつ今朝より實ホ煙を立て竜城
せしし兵ホム白粥をものるホ一碗の外ものるしく久しく餓て食ム飽ば忽地命を
隕を故ム加以彼兵粮の半を散。城外なる民ム賜ふて。をさく飢渇を救ものハ
拝し受ことを我領ち鼓腹して命を延その縡の為体輙魚の水を獲るる
如し。かるを東條の城を攻ムとて向ふをする安西景連が老黨。茗戸納平

ら。とへそそ。
然るに十重廿重水囲こんこ。昏夜をこそび攻寄せども。件の城は滝田ホまこ。ふ。半月
の貯禄あるこ負軍は敵式拂ふて。滝田の後詰式せんとあこ。ちこ。ゆ。
両の夜風のうへゆに敵陣へ夜討さること再三さびこ及びこけこども。郎方の勢ホ
比ここ寄せは大軍なる式りこ。捷といくども烈風の塵を拂ふが如ホ至こ。
敵は新隊を入ここ。弱兵なるこいなるけこかくある日のうなるこ。
景連は果敢なく敗こて滝田の囲を頓こ釋ぬ曹司義成こ板倉氏元を副
ら。ここ大軍當然へ援来るこ。誰いふとはなく風説ホて城兵は式式ホて
勇気日来ホ百倍。寄せの兵ホは気を失て劇驚ぐこ大こなるこ。
程納平はゆども空ぬ。ちこ士卒を罵こ激さるこ。きのふふいや
まこく風ホのまこく味。現虚去ゆはあこざるべ。とこくべいよ。怖気づ軍
兵ホ示あはせば納平は勇親式ゆ西三人を後へこ。鳥夜こ紛れて落こ

こ。天明こ寄せの軍兵は大将逐電せよ。式せやくホ知て名れば衆皆呆れ惑ひ
つ。生大将の憎さよとうち腹さろのこ。せんさべなこ。こ。諸軍有一坪式して城
中へ使者を遣。皆阿容こと降参こ。負軍は二こ。このよ。式滝田殿へ申せこそ。
騎馬の使者をまゐらせろ。その使者と滝田より勝軍を告来つる。兵士こ。ゆき
あ。かて。従使は東條へ来ろ。て景連ぶ命を隙せ。この趣を告ろ。せこ。御曹
司義成を大将ぬて板倉氏元を副こ。不日ホ出陣のよ。式告。こ。は當地の敵を拂ふて。
館の両城を攻ん。ろこといふ負軍は滝こ。君命をうけゆ。こ。再こ使者をまゐ。
せこ。勝軍を賀。こ。り。扨曹司の出陣を今こ。こ。ろ。猶こ豫て義実の徳を
慕ふ安房朝夷の士庶良賊景連亡びねと。ゆこ。館の両城へとりこけこ。
その守将を攻滅。こ。戸納平ホ首級を齎。て老ぎたるの数十人東條へ
来つる日ホ義成氏元陣。て負軍ホ。ろ共こ。緯の趣を書写。滝田の城へ注

進して件の首級を献ぜんに実に安房朝夷のわどもを召せのひく物縣被させ
御曹司と氏元ホ御教書をもへアてく館の西城を守しのかくてぞ四郡一不四
義實管領しもへ威徳朝日の昇ごとく。徳澤ハ時雨の潤さごとく。奸民ハ去ぜ
吾人ハ時を得ること。長ようまして夜戸を閉ざ又送さる紙拾よりの区久後ハ牽
ちこ濱ホ波風立ざるのしるべ鄰四の武士いつべさらん持氏の末子成氏朝臣鎌
倉へ立ちくるとくんや年来ホ忍のしるべこのとき氏滝田へ書を贈ぜく一四平均の
功業を稱賛し室町將軍へ伺のえあげて則里見義実を安房の四主ホ
る。剃治部少輔ホ補せらるよ伺のえ義実歓喜雀躍して京鎌倉へ使
者を進ぜ土産を献る。持氏の李子成氏とのふ。ハ嘉吉三年ホ長尾昌賢扶ぜて鎌
倉へ近ハ管領ぜ。ありて成氏ハ鎌倉ホ居るところ。康ホの年間下総なる許我へ移住しるひろ十餘年を経ようけれども故
ちこホ年序を慎まこの年のするくん紀成氏のる九代紀ホ入えこり。この下ホ結ぶ。ホ歓ぶべく祝ぐ
べ氏。のこのこちも続くめろ。義実ハとホかくよ。ろよかるハそのちぶ安

西ホ糧を乞へとく彼処へ使者ホ遣しこ。金碗大浦ぶるえ。渠ハ年ろ四ろ
けまとも阿容ことをを東ぐ敵ぜ擒とろのなぶ欺まく駿まこ又
その勢の多少を討らぶ熟ぜ穿ぜを拄く可惜命を隕せこ。さぶ氏ふ
までも。かり系ぐぬるのハあじ。ぜ氏ハ不憶土地を開きまこ。富裕ぜ受ぐ。ハ
彼ぶ親の資ホよまり。かまべその臨終ぜその子を長狭の郡司と。東條の城
主ゆせん。といひつるぜ残いまぶ果さぶ加ハ。ろぶよろ許せ。ぜさハ。ろる
ぬの残ぜたてや渠ぶ亡骸ぶも。ろるよこるの氏ハ送憾。拝を伐草ぜ刈拂ひても。
そぶ存亡をぢこせよとて豫て八方へ人を出。さ氏くまでも徇ぢこ。隈ぶく
索させ。ど往方ハ絶ぜ。ぢれざりけ。さる程ぜ義実ハ老堂士来の勲功を
ぢろくぜ攻正こ。呼領を増し職を進め大方なぶ勧賞を行ぜ。
るのちぶぜ八房の犬ぢろく。第一の功と定め。朝暮の食起外の衾美を西さ

きこくいふべくもあらねバ。犬養の職を罷、奴隷数冊けらく出るとき八先を追せ。
入るとき八後ち護らせ寵愛耳目を驚せども。八房ハ跃ハ低尾をふせて食ハず。
睡らずいぬる霄敵將景連が首級を求めて来し縁頬のほとりに来て立ちまつ。
主君の出させ給ふを見れバ縁端に前足を懸ろく尾をふりて鼻を鳴らし。
ひとめくむるのあるが如し。さりけれども義実ハそのこころを推あかぐりて
魚肉餅などを折敷にさへ賜ふけれども。八房ハこれもかへり見ざる求むる
る頬りえ箇様のもの為かさらにあらざれバ。義実ハ大くさふ犬のこころを推量りて。
めしことふのやとおぼせしが忽地寵愛を失ひて端近くハ出させ犬養にして八房を
遠くさけさせ給へど動きもせず。此ハ哮狗にて犬養ともが後にぞ果ハ涕を
引離て禁処人を噛ひ倒し彼縁頬よりて跳登りて奥をうかがふ処に彼此と
なく奔走ぐれども追ふ犬養にハ憚の関の戸あらばこそ挑てあるよ。

あれよと叫ぶのミ男子のミにぞある乗せね犬が哮狗ふるのみ。あれバ侍女们ハ
一噂におそれ惑ひつ立騒ぎ。彼首へ走れバ是首へ逃此方ぞ追へバ彼方へ走る。
犬ハそのたびに人も狎ひよく障子蒸襖を推倒し叫び吼りあるかぎりに伏姫乃
とりしおれ後堂へ追入りてり。このとき姫ハ閒人もなく書案に肘をつきて。
枕の草紙を御覽ずるに翁丸といふ犬が勅勘を蒙りて捨らされし縡の趣又
ゆるされてくへり来りし為体をいと愛くぞ書たりける清少納言が才をさへ
羨ミ昔ハかかるもありきとおもひとりどちつつその順序を繰返しあふれ侍女们が
叫ぶ声しく背後へ走り来ぬめあるその疾ども飛びだして牀に立さる筑紫琴を
横ざまに倒しうけて棠の上へ碎と砕き咄嗟とおどろき給ふのハ是則八
房そその面魂生平ならずぞ。すハ病つかれたるるかんあるらんやと書案を推
やりて立んとする程に犬の臥となし前足を長ゆ袂に突入りもて進退特に

不便なり。現に十年畜育て大犯なるを犢は老犬が壁を
なりとたるものなれば。後方より引きそらまてく。頻に人犬ゆせるへ事
女小扈後女の童悉もあへぬ走来つこの為体をいふまでもなく。うち驚くのを
近つ犯なぞ引提来まる筆のなく。席薦を襲ことうち敲犯此くといひつく
おそるく。追生とまれば八房は眼を瞪らし。牙を見出て跳まる形勢凄ゆれ。
侍女們は筆弦捨て。逡巡せぬめとは浩如に義実は綽ぬやあらせるひ
けん。短槍引提て来るひとり。戸口に立てあそまる女の童小犯此退けて。
遽しく進み入れば。畜生とく生よ生めと引提る短槍の石突さし柔く。
追ひ出さんとあるへども八房は些も動ぬ佶と向上て牙を張りやまもく哮る
声凄ゆく。嚙もからん形勢なり。義実は勃然と怒りの余ぬ声をあり立理を
非もなきあらぬ畜生よ。いかは主盗ぬ仇くまとぬ愛まる主ぬ者ありつらん。

ぬ。ひあらせんと敦圍あくまぬ槍とり直して突殺んとるへば伏姫は刃を脅ふ。
やあ待ぬ。あまる大人貴犯ぬ刃をいつるまぬ。牛打童は等して畜生の狂状咎め。
あんぬ弑ぬ。物体なるは佶ぬ。聊ぬ佶ぬは枉てあるさせるひ
犯。といひつく貝弑拭ぬ義実は突うける。短槍を引く挾ぬ異る姫ぬ諫
言なるいふ。あらばとく。といそぬるへ。ちふ涙を禁め。顔を改めいと
憚ある事ぬ佶ぬ。今は昔は和は漢は。かくと犯君の政事。功あまぬ必賞あり。罪
あまぬ必罰あるは。功あまく賞犯ぬ。罪ありく咎なるはその囚亡び佶ぬ
ちん。譬ばこの犬の如犯功佶ぬ。賞犯ぬ。罪なるして罰弑ぬ。不便ゆはば
さぞや。といふ弑義実はあくまぬ。ちん刃が異見甚さぬ。剛敵頓ぬ滅くなり。犬の
為は職を置食は珍饌美味を與へ。裇ぬ錦綾羅を賜ふかくてもその賞は
といふや。と結ぬるへば弑義実は喻ぬ佶ぬ。又君子の

山青堂蔵

よりさいろう義実怒て八房を追入とき

搜神事實 昔高辛氏有犬戎之寇。帝患其侵暴而征伐不克乃詔募天下有能得犬戎之將吳將軍者賜黃金千鎰邑萬家又妻以少女有畜狗其毛五彩名曰槃瓠下令之後槃瓠俄頃銜一頭泊闕下群臣怪而診之乃吳將軍首也帝大喜且謂槃瓠不可妻之以女又無封爵之道議欲報之而未知所宜女聞以為皇帝下令不可違信因請行帝不

得已以女妻槃瓠槃瓠得女負而走入南山石室中險絶人跡不至經三年生六男六女槃瓠因自決妻好色衣服製裁皆有尾其母後以狀白帝於是迎諸子衣裳斕斑言語侏儒好入山壑不樂平曠帝順其意賜以名山廣澤其後滋蔓號曰蠻夷今長沙武陵蠻是也又北狗國人身狗首長毛不衣其妻皆人生男為狗生女為人云見五代史

一言ハ駟馬も及びがたしと聖経にもあるとかや。物の本をも引て伝る悲しきかな笑うべし。
景連を討滅して。士卒の餓を救んもこの八房を増ぐるにしかじとあり。
されど。候令そのこと苟且のちん戯なるまでもとも。下さじ約束なるひとゝ生て
ゝとぐるも及がたし。かゝるに犬が忘れがたき恩賞は君が隨意許させ給ふ所なり。
渠大功をなすに及びて。輒に約を変じ。代るに山海の美味を賜ひ又錦繡の衣
金銀をのたまふ足なんと世にもてはやす。人ゝ朽をしく恨しくもひなをん畜
生ゆゑ人にまさる大功あるも又その賞にもこゝろの我許させるひとも皆前世の
業報と思ひ決めて。国の為後の世の為棄させる子を生るゝ畜生道へ侶せ
ても政道に偽なきこと我民ゆゑ。ひとしく安らけく。豊けく治めるいまゝ盟を
破る約を叛きし。彼景連と何をかは異なりて人やさんやいと浅ましきかな
子の鳧の先なる智恵の海も濁らねばこそなるにこの西条と公

ゝをみてけふよりは恩愛をこゝろの義を断て。こゝろ身の眼のまへ子とつく親に
棄よとこそ。異類ゆゑ少女子は大千世界我家にも。こゝろゆゑ外に伯母とかの詭
の袖の上に落てたゞ一粒の玉なるこの子ゆゑ。実は黙然と。
と毎に嘆息して引提し鎗を真哩と捨鳴乎悵哉。あやまちぬ法度は上乃制
をる所上まづ犯して。下犯を見大乱の基本なり。実は八房に姫をもの公
ゝ。なしといへども云々といひつゝ彼と我口より生て耳に入る菌相如が勇を
のく。夜光珠とりかへしとも返しゝ。こゝろは口の過禍の門に外を大いなる水の
仇なりきとつゝしく来る我おもへば前家なるあくどこの子が幼稚なり
時立願の為潜やゆゑ洲崎の石室へ籠らせ。その途に老人あり。伏姫をまんくさー
招たこの稚児ゝの病なる夜とゝなく日とゝなくむつかるゝ。みる悪霊の祟ゆよる。
こゝ我委細に説明せば天機を漏さのかぞまとあり。伏姫といふ名ゆよりてみづから

晴そぶ曉日なん。おろかなるかなこれらあよう式主君よさ世とつひとぞ忘るゆ
姫へ嘉吉三年夏月伏日ゆ誕生せり。因て三伏の美をとりて伏姫と名けさせ
この名よつ死て判せよとへいるなる哉そとさるかうさるべくとあらひ當らぎ。
彼曹公が三十里を遅しとおもふ人さつゆもおらぶ
同ぶ。と待ゆ久し死年式拝て。けゆ由へりるく解しゆう。伏姫の伏の字へ人ゆ
犬ゆ後ぶこの狗尾のあるべ死る。獨祿の中より定る所欲名詮自性といひんべ彩
おるぐ勢念深く崇るに災式雖とへ志ゆ式ゆ定包が妻ゆり
ける。玉梓るどゆやおとえぎとうん彼淫婦へ主を傷ひ又忠良式追失へる。隠慝の
袋えあり。志るとど由下さびへ命助んといひて。赦さぶとけるる是ゆ怒なるとと
かるらねだ。子ゆ憂へゆの限り式へ世て。非理の怨式復さゆなん。さへこの犬を
世うせて。狸が育しゆのと他へく狸の異名を野猫といひ又玉面と喚做せ。その玉

面を和訓よ唱へ。是則たまつらえ玉つさとおつうと訓続近死も忌こ死よ。
つぐ賢しげゆ狸といへ字へ里ゆ後ひ犬よ後ふう。あ是へ里見の犬よなる祥へと
ゆひとるつ富狩。寵愛せ。こそ悔しけ是。現天道へ盈る式缺公羽が教誨當れる
ゆ。今ゆしく百遍悔千遍悔たその甲斐なく畜生の為子を棄て恥辱を遺さ四
あ。討後へて長久よ百世害甚を受るとも何ら楽くもへべ死面目ゆ。と理よ
さとたゆの限り涙畫。慚愧後悔志ゆへゆ側よ果る侍女们慰るひつ。なるくゆ。
光の怖さゆ死流を涙へ滝のつと逼て。皆りるたゆ泣よけて涙えてゆ伏姫を。
苦り死痞を拝おろ。使て犬ゆ。ゆ怪ぬ歎死よ論むなる況や親の恩おろ式推
量てへ是ゆ。なるさぬ不孝ゆ罪車。さりるべら。一旦鬼畜ゆ伴は侍淫よ
偽りるべよ。式竟よ果さび玉則ら命へ。とそひ決て付るなる。
ふゆ受て死人の身を受て生れて成長ゆ親の遺體をちざくと畜生ゆやい

機さるべきにこそあらめ。さく思召せ。といひけれども赧む顔色掩ふに俯ぬ。実頼ふたゝび点頭て。遠く異邦を考れば高辛氏の槃瓠ぞ。よくこれ今の患に似たり。又干宝が搜神記に。大古のとき大人あり。遠征して久く還らず。妻は世を去りて只一人の女子あり。年十八と成ぬ。その家に牡馬あり。かゝて女の子は旦暮に親慕しく。その馬はいつも對ひ向ひて。次第に成果なりて。遂に牝馬に交をなすとぞいふ。これを信てや彼馬は絆を断て。こゝぞ走り去りぬ。数日を経て還るとあるが如し。又怪しき女児に向ひ如此。この事あるとを答ふ。いかゝ。かくべきなりとて。又穏に馬を殺し。皮を剥て簷に掛置。當下女児は馬皮を纏て。斎生ゆゝしく人に求婿し。報いんに早からばや。皮ふなのまとてあるに吾倩を娶るやいなや。と罵れば。その皮撲地と落かゝりて。女を楚と推包て。颯と飛上る。風とも成て中天に入る。翌日庭の桑の樹にその亡骸を掛たりしその屍より虫生れ。是蚕と成て。唐山の人は信じ。これを搜神記に載せたる。大古の人は多くは信じ。成氏元ホの館の城を守れとて。いまだ比ならぶ條の城にあるとは。その外は内にこの成相潭べにもあくまで好も又也。今たゝひ決めたり。女子は八房。たゞ犬にこそ。汝が勲績高くは。伏姫を與へ。且く退出て。犬は侯。といふ。いとゞ八房はつくづくと主の乳色を見てとりてや。やゝ外面へいと徐ろに出てゆく。

第十回

禁を犯して孝徳一婦人を失ふ
腹を裂く伏姫八犬子を産まを

義実の夫人五十子八房が為体を人の告るに驚き怪く。裳裾褰て遽しく伏姫のさろーまに子舎へたゆ来るひーぶ。とんをとび入れ陝まで不侍女们八戸口ふさり。治部頭義実をいかもさろーまを尋ぬ姫ゆ恙るれのくろ。親子ぶ中ゆ犬を置て問答の最中ゆこのゆの果るまでとく。竊ゆーつ潜然とうち泣てゐほとりとゆ寄らぎーく侍女们ゆ出くゆく犬よりそをとてく。ちりぬぎ左右へもうれーふぶ交加乃路やゆあるく。躁れ果べうとあくぎ五ゆ来り入るるく姫ゆ人のほとゆ人撲地と伏流こ声を惜ぎ泣ゆんぶ笑ゆ悔らひとく。うちっんるのこ扨宮ゆ伏姫ゆ母乃背を摩おろーゆ又抱もろー。縁由をゆのろ召せーゆ欲ちん心持ゆいくふぞゆと慰られて母ゆ入ゆ形式擦く涙を拭ひゆぎとゆいくぶく歎式せん嘯伏姫。よゆも怜悧く

おーゆまゆば殿の伴綻ゆ表裏ゆ。賞罰の道直れとて名式汚し。身を捨身。ゆゆ父ゆ人ゆ考れるるゆ元情ふ悖り。俗ふ背るゆば誰ゆとれと誉れる元生とて活るゆの二親ゆるゆねもあくざゆ。母ゆ歎式ゆ式ゆりゆびや。さゆとゆゆ八心つよー。幼稚とゆの三ゆ病なる母の苦労をゆゆくゆ昔ゆこをふるゆ。まぞふ。生育るゆべゆ又ゆ又増に漂致ゆ月も花も及ばぬゆ式いくなのゆびゆれくゆゆの身を贅ふて悔しとぶふもゆばざゆゆ。あやふゆるゆる物の怪の。ゆう移ゆ西るふ行るべー。やゆ覚ゆ人。覚ゆ人年来念ゆる神の加護佛の利益もゆの元世欲と諭ーゆ泣ゆ。いとせゆて。ゆ。返ーゆ母の慈悲ゆ伏姫ゆ堪ゆ。ゆー涙を袖ゆ推包ゆ。ゆう宮へゆ不孝の罪ゆ。ゆ元ゆ上ふるゆ重ー親の歎ゆもかゆりゆゆ。ゆる元後ゆでも名を汚ゆ。ゆ元哀ゆねゆ行ゆ為ゆ命運の致を呼寔ゆ脱ゆ元業因ゆいゆひ決めゆく行るゆゆこれ腐せと左ゆふ掛ゆる。孫数ゆやゆと右ゆふ取ゆ。ゆゆふゆが幼稚ゆ元ゆと元役行者の化

現と無くん。あ母死翁ぐとくせーとく。賜りしより身を放さぬこの水晶の念珠ゆも。
数とりのごとく文字ありて。仁義礼智忠信孝悌と続きてる。この文字を彫付る
あらざる又濃ーく書付る付くぐ自然とすーぐ見ハれ久。年来日来くゆゆ觸れ
ることども磨滅付ことなくしを小景連ぐ滅びーとそれ。ゆくりなく元付きぐ仁義の
八字ハ蹟ゆくなりてく異なる文字ふるゆと付り。この比ようやくぞ八房ぐ。ことふる
懸想を付るふるん。こと扨ーの不思議なる。過世ゆ定る業報欲と歎くハ
きのふけのきなくぐ。その期を俟さで死だゆ。と思ひハいくそ遍くゆゆハ刃を
とりてえぐら。否この世ふーく悪業滅ーゆぐハ後の世ゆ浮むよりとぶハいつ迄も。
あしの山ゆち花。花のみのなる果と神と親とふ仕せんりの欲と形ゆ元浮世の
秋ゆあひ付り。されらのよ成かーくと暁ゆ。ゆぐ恨も忽地散てるくゆ。
ゆひ終さもゆハなん。さても十あまり七年のあん慈愛と他ふ世ゆ子ゆ子に

あらぐ前世の怨敵なくゆと思食く。今目前ふ恩義と絶御勘當なーゆくバ。
刃もとゆゆ受ゆ恥辱ハ又ひまれ来ん世のゆんと墓なく頼む弥陀西方佛の御ひろ
糸筋尾花ゆ下ふ刃を置とゆ。竟ふ悪業消滅せバ。後世とく果付ゆ人只我
一死ハこのゆのをとくく許させゆひねとさーゆ世のふ殊数の上ふ重ゆ浪数
そひてくのづを百八煩悩の迷ひハ解ね母君ハ疑ーげゆ顔うち熟視さまでゆある
ゆゆゆゆ初ゆり如此くと親ゆハなのごとく告ゆハね。什麼その殊数ふ顕ゆいゆ
なる文字ぞと問ゆハ義実此へと取ゆて。うち返ーくつくくとうんく嘆息ー五
十子ゆひ孤ゆ人仁義礼智の文字ハ消く。顕ゆてるふ如是畜生菩提心のく
字ゆり。見ふりてゆゆゆハ行五常ハ人ゆあり。菩提心ハ一切衆生人畜とふ
あらざる色。かゆゆハ姫ゆ業因も今畜生ふ導きてく菩提の道へこけ入ゆハ後の
世さゆあとくゆ。定ゆ貧賤栄辱ハ人おのくその果あゆ姫ゆ三五乃春れ

比ちり。鄰四の武士ハさらえ彼此の大小名或ハ男の為子の為ハ姻縁を募来る。歳人といふて或ハ或ハ一切義打を今茲ハ金碗大補を東條ハ城主ゆゑ伏姫を妻せて功あるなぐ賞ハ辭ず自殺ハ孝吉ハ剛だや。忠ひつ。言過失く畜生ハ愛女を許さ業ゆり因るなる五十子ハ義実をうらめしとのミ思ひ暮れ只この殊数の文字ハ只ハ哭くみづくく哭りのひ孤と叮嚀ハ慰ちく。況あるとも晴ぬハ袖の雨ハ偽ひ声曇しく泣ハ哭かくさあるべたとる孫伏姫ハ今宵生んとその准備をぞいそぐ。ちくさども生てよハかへりくるを来んエ思ひもかけぬ只この怪ゆとなひく。玉梓ハとり捨て。白小袖の龍衣彼てく。件の殊数ハ衣領ハ掛。料紙一具と法華経一部。外ハ物を抱せ孫ども。八房ハ遠ハあ後者なども。かくて辭ひく俱ハ。ちぐ何ハ。ちくら孫ども。八房ハ遠く隨意ハ。ちくく苗床ハ。ちくて。日ハ死とてくなるべ是彼り

さく紙立ハ去ちぐ。今宵を過さぬ命ぞと思ひ決めく出ハ時ぞや黄昏迫るべ。さるべあん毋五十子ハいとぐ別の惜けきべ。立ハく去ハ袂を掩ひ先哽ハ泣ハ泣ハ。年来使ふ侍女ハ。侍女ハ。是首彼首ハ泣倒ふ伏流ふ物の要ハ立ハ。さ居ハ伏姫ハ共ハ消なん露霜ハ袖ぬらさ。と村所のちくつ。げハ母君を慰めく別を告侍女ハ遠ハ。ちて。外面ハ出ハ日ハ暮て後園ハ樹間漏る月さやかなるふ既ハ。ちく八房ハ縁頰の下ハを。姫ハ人ハ出さ世ハ紙ハ前よるまハく待るべ。當下姫ハ彼犬の。ほとり近くうち對ひやハ八房ハ狗ハ。ふ人ハ賤の差別ハ。ふ婚縁ハその分ハ隨ひ。ちな数紙して友とせ。かれば下の下ざるなる微ヨメ子児ハ。ふ畜生を良人と妻とせ。ふ例紙ハ。況でや吾侍ハ四主の女児平人の婦となるべ。さる紙今畜生ハ方と棄命をとてくさるる。前世の業報欲併最君の御掟を死ちくく。ちくのく紙

辨へず。情欲を遂んとするぶ。ゴロ懐剣こそあれ。汝を殺して自害せん。又一旦の義と以偏に吾倚と伴ふとも人畜異類の境界を辨へ恋慕の欲を断たなんぐ。汝は則ち犬なる。菩提の郷導人なるべし。然るとも犬は汝が隨意何地へぐも伴ふべし。いざゆゑ。と懐剣を逆手に取ぐ向結ぶべ。犬はさろ戦ぶりけん。いとう丈へ〜犯ちりぐちなるまーぐ。忽地に形戦拳。姫うへ戦ぶ〜長吠〜く。蒼天どうち仰ぐ。誓ふ如き形勢に伏姫は刃を抜きて。ちろ〜ふ出よと宣へば八房は先に立て折戸。中門西の門。ち踰ち越中く狗に姫はそぶ後に跟く。徐に歩行せ給ふ。跡ゆは母君女房達ぶ。よくとなく声ゆえつ。義実も遠外に雲妻時目送り給ひける。彼昭君が胡国に嫁ぐ恨もいやまして。いとも哀れ別離の情あり丈といふも疎なるべし。扨も伏姫は豫て送りの従者をかく〜辞せ給ひ〜ども義実も五十子も路次の狗ぶりとぶ。えかく〜ぶ〜えよ〜とく蜑崎十郎輝武は壮士数屬

させ給ひて。霸に遣ー給ひける。件の蜑崎輝武は原東條の郷士。曩に扶倉氏元ぶ。に属て麻呂信時が頭取くまゆ〜せる。軍功を賞せられ瀧田へ召れて。義実の傍に近く使ひて。年来まゆ〜のしぶ。義実と戦撰出〜く。俱ゆは立せ給ひ〜。さる程に輝武は馬より跨鞍兵を引て一町許後れつ。ち跡を跟く。ゆは房は瀧田の城を出そゆ〜とそぶ侍は姫を背中に乗せ給ゆ〜せ。府中の名ゆ。花ゆ〜ゆ。輝武は後ぶ〜と頻に馬に鞭を當。鞍兵は喘〜行と。ち〜ふ追ふ程に。ち〜歳の道戦ゆ〜。犬懸の里に至れば鞍兵は遅ゆ後ぶて。輝武は後ゆ。一両人ゆは過ぎ丈ども。馬は逸物乗人は達者。いとで往方と失ばぶ〜。終夜走ぶ〜。富山の奥へ入り。抑富山は安房国第一の高峯ゆ〜。伊予嶽と伯仲。その巓に攀登れば。那古洲崎七浦に浪のよる〜入る〜とゆ。山中さべ〜人家ぢ〜。巨樹枝を

垂直くいと暗く荊棘樵夫の道絶埋て苔滑て霧深し。かゝく十郎輝武ハ山路より
馬を乗倒しく。直と黠兵と僅に二人息吻あへぬ攀登る山又山に雲おさまりて
迫る彼方を向上れば伏姫ハ経を脇負料紙硯を懸て乗て八房が脊ゆ尻を
掛たゝ谷川絶うちつゝとしく。あゆ山ふく入り為ふ輝武ホハ辛ゝ川のほとりよ
ゆくけきとゞも水ふゝ流まゝ。ゆくこゝ。ゆべゝもあゝぎめるまでなるく来つる
甲斐もなく。川一條に禁られて。ちん往方をゝ穴ゆ。さよりうへ山とゆある。
嶺をせんと輝武ハ遠しく立て杖をちゝらゆ渉しもあゝぎ。横ざまゆ推倒
さまつく一声苦と叫びつ。石ゆ躓絶うち碎まゝ流りちとゝ水のまゆ〳〵骸も
そゞめびたるまゝ。枝も蜑崎輝武ハ海辺に人となるまく。水煙の達者ゝ
しゆ彩墓ゝくも流さまゝてゝるまゝ。直と黠兵ハ坐ゆ舌絶掉ひく。
航く禁へ立久ゝ後れゝるめ緒ともゆ次の日の夜をまつゝく。瀧田乃城へ

かゝゝまゝ。ゆ絶の趾をまゝ。くけまゝ。ゆ実実委細に改め召て再て人絶遣しゆゝ。
只四中へ徇ゝらして。樵夫炭焼の翁とゆふとも。富山へ登ゝ絶許さゞり。
彼山へ入るめあらば必死刑に彩んとく。嚴重ゆ捉させ又蜑崎輝武が枉死と
ゝく悼おゞくゝ。その子どもを召出ゝ。ゆのゞくゞ使せるゆかゝまけまゝども
五十子ハ伏姫のゝとゆかくゆ日に〳〵忘まゝくさけまゝ。行者の石窟へ代
絶といひゝらへ月毎ゆ老女ホを竊に富山へ遣て彼ゝ所在をさゞね
させ安否をゝらまくゝひゝゞ蜑崎輝武が推るゞさまゝる。彼山川より
あゝりゝゝハおゝまて渉めゝるゝ。固より川の向ひゆゝ常ゆ雲霧立
こゝまゝゝ渡ゝもなゝまゝ。ゝゝば老女ホハいゝつゝよゆゝてかゝるとゝ渡。
早暮月よなゝまゆゝ。不題金碗大神孝徳ハ曩に安西景連ゆ出抜れて
敵ゝ瀧田を囲む絶ゝらゞ。僅に曉まゝく走還ゝ。途ゆ納平ホに追とり

らるとて。ヨヌ勢を敵とする血戰。後者ども皆殺せしまどもこゝぞ力をとろへ
虎口を脫さんとて。ゆうゆう瀧田へ立ちくるる。安西が大軍充滿たれば攻圍む最中。
ゆうべ城へ入るとて竟よかなるべきぞ。せめて堀内負ひ入る一臂の力を裁せん
とて。東條へ走りゆく。彼此も無戸納平ホが大軍に囲れて。竜中の名ある異
なる稜び輒く城へ入るべきもあらじとかくこそとたゝかひ瀧田ゆて一騎たりとも
敵を殺さとり。城の橋を梳ゆ。討死をさべりしと今は悔どもその甲斐なし。
大事のもん使を為損じ。剩主君の先途を為立びようや。両城の囲釋く君
羞なくやりまつるとも。そのとゝ何の面目ありて。元系に入らるべ。死無戸が
陣へうけ入て戰死せん。と只管に早使をみづから推結めてやらひたまふ。
つゞ月をとろ弦のごく。数百騎なる敵軍へうけ向ふ。鷄卵をうく石を壓た
そもとりとるに墓なる死所ぞ。命を捨ても敵に損なく。射方に益る死

るべきに。是彼以不忠なるべ。西城素より兵粮乏し。謙倉へ推系しく成
氏朝臣へ急ぎ告援兵を乞ばしく敵戎拂ひ厄を釋べ。ふぶ悔を中に寛る。
因がをこれにまためあらじ。速に謙倉へ赴ぞと尋思へ白濱より使紙
をたく日なるべ管領の御所へ系ゝ。義実の使者と稱して来田を殺意を
告とさく。敢ひ紙をまうせども。義実の書輪るるとぞ。孤疑せられて支
繫べ入ぐるに日を経て甲斐なく安房へ立ちれば景連ゆ滅びく。
一四既に平均せるとあるに。とゝろふゆ。いよく帰系の使ひなしさりとて
今さら殿も切られぬ。時節を俟てこの條の憐息を勸解ばん。それまでの
隱宅ゆとく。舊里なるべ上総なる。天羽の関村へ赴く。外祖一作が親族
なる。百姓某甲が家に身を寓せ一年あまりを経に伏姫のゆ灰に焼
えく。八房の犬に伴ひ富山の奥へ入りぬ。安危存亡定かなるべ。

一言信を守て
伏姫深山に
畜生に
伴ひ

伏姫

この故に母君はもとひ日ゐそひく。長死病をこれ社ゐと告げるのあり。
ゑ大捕物くうち敬男死君失言ゐとも正しく妻人の息女とて畜生ゐ伴ぞ。
さらの人の口のみに。かくとゐのいと朽を。件の犬に霊憑く神通をるこれ
ゐ。ゐかゐ死とやあるこれ彼山に登り八房の犬を殺して姫君を倶し奔る。
瀧田へ入て八重垣は賠償ぞとも云ふ。先世式のことんに疑ひなしところ
ゐこれに尋思ん叔宿のあるゐ中心形あるとく社糸さと実しゐかいひて
ら入竊に安房へ立入るとく。准估のを続引捉つ。富山の奥ゐに入りて伏姫の
あん所在を其処に見ると雷れ山路ゐ暮し。山路ゐ明して五六日を経て稚に霑
ゐ死谷川の向ひに人ありとおぼし。とろやと騒ぐ胸を落ちく。水際に
ついゐくつくと笛ゐ女子の経続む声いとも幽ゐ聞えけり。
作者云この後八犬士の起るべき所以式をきく演述しく。筆集五巻の尾と

定め既に首巻ゐ十回の題目を載るといへども。ちかよりく御語ハ。
ちくちなるこゐ巻の張数を盈く。今この後を率居ゐ。ほさい巻数に
定めあり。又張数ゐも限りあり毎編とき式るべしとこれハ賣買に便宜
ゐつくどといふ書肆ゐ。ぬき推辞ゐ。ちて餘稿ハ巻を更く。明年かちくを
嗣出さん大約さくに演る所ハこの小説の發端のこと。より下ハ八犬士の
世ゐ出べ死ゐ及べり。この後又年式歴く八子八方に出生し聚散時あり
約束ありて竟の里見の家臣となる八人の列傳ハ前後あり長短あり
ゐ。其処ゐ式ハ攻果さどと年式かさ孫巻をかさ孫て全本とうさんゐ。
曩ゐ予ゐ著しく弓張月の如くちるべし。閲者幸ゐ察せよ。時ゐ文化
甲戌の秋九月十七日。鳥の屋ゐ毫を閣く

南總里見八犬傳　巻之五　終

編述 曲亭馬琴稿本

總巻浄書 千形仲道騰寫

出像 柳川重信畫

繡像剞劂 朝倉伊八郎刊

○曲亭新著出像圖字小説畧目 山青堂開版

袈裟御前七條法語

この書今茲の夏兄のよう。稿てを相嘉せ。八犬士傳を著もとそ。編述ちふ。あらぐ五ねと。なほ近刻の念ひあり。あるは復書長式ーしう

美濃舊衣八丈綺談 北嵩重宣画 全五冊

○馬琴畫賛扇并。家傳神文湯○精製袋きもの丸○婦人つ花虫の妙薬ホ大坂心斎橋筋唐物町河内屋太助方ゆあり扇ハ江戸神田鍋町柏屋半兵衛方ゆもあり

朝夷巡嶋記 初編五巻 歌川豊廣画

この書久しう書名を揭ぐ。今茲ようやく稿成て梓に上る。初編二編連續なく出板

南總里見八犬士傳第二集五巻 柬亥の冬連續なく開彫せ

文化十一年歳次甲戌

刊行書肆

大坂心齋橋筋唐物町南ヘ 森本太助
江戸馬食町三丁目 若林清兵衛
本所松坂町二丁目 平林庄五郎
飯遠橋御門外神田平永町 山崎平八

冬十一月吉日 發販 井川閑松堂